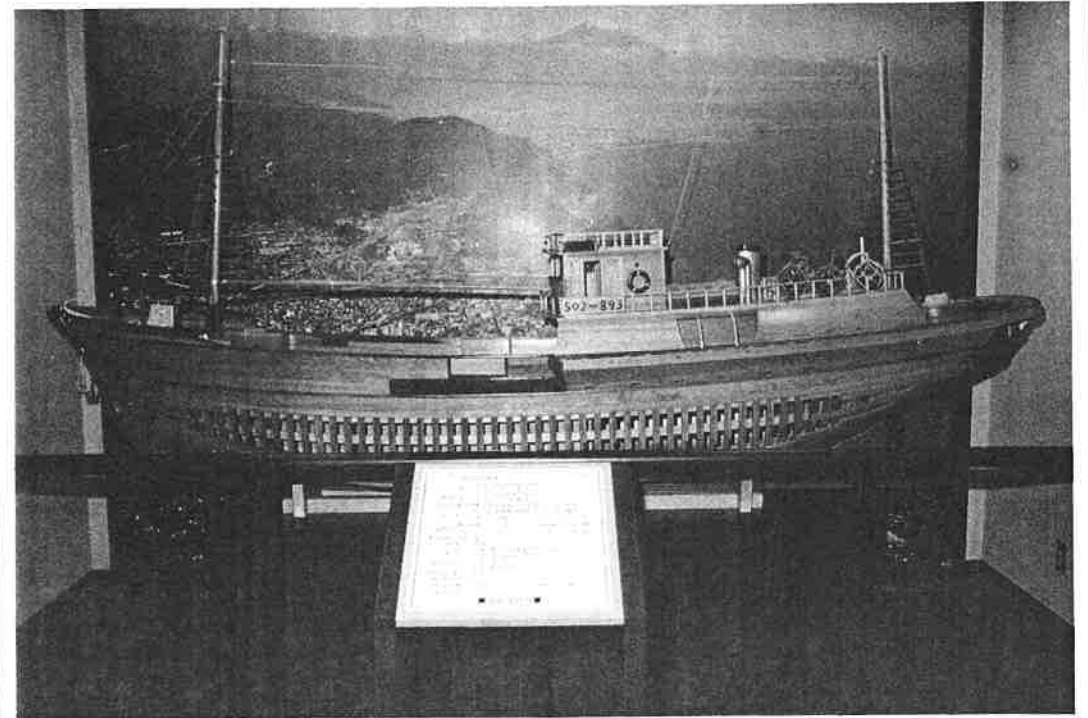


福竜丸だより

— 都立・第五福竜丸展示館ニュース —

(財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

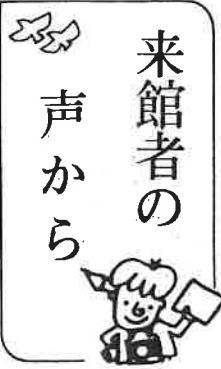


6月30日、焼津市にオープンした歴史民族資料館に
設けられた「第五福竜丸コーナー」

誓

(前略) およそ、全世界に平和を願わない国はなく、すべての人々は平和で住みよい世界を希求していることは言うまでもない。
被爆市民をもつ当市は、再びかかる惨禍の起らないよう念願しつつも、従来のを求める運動に全面的にはくみしえなかったが、内には核兵器無き世界の実現を願って心の炎を燃やしつづけてきた。
このたび歴史民俗資料館に「第五福竜丸コーナー」開設を機に、思いを新たに核兵器の恐ろしさを確認しあい、その廃絶を語り伝えることは、世界最初の水爆犠牲者をもつ焼津市民の使命と信ずる。しかし、これは現実の国際情勢推移の中で決せられるべきものであることをもわきまえ、われわれの悲願が全世界を動かすものになることを期さなくてはならない。
われわれ市民は、ひとしく敬けんな祈りに似た思いをこめて、目的達成に向ってまい進することをここに誓うものである。
第五福竜丸事件
6・30焼津市民集会

来館者の声から



はやくなおしてね。それに船やおさかながかわいそう(生形ゆう子)。

今日はおもいがけなく梅雨の晴間となり幸でした。ありがとうございます。長生きしてよかったとおもいます。福竜丸の想い出もあらたに、世界の平和を願わずにはおられません(橋本清・72才、佐藤ユリ子63才)。

六月展示館寸描

水無月は梅雨。連日の雨に展示館を訪れる人々も心なしか少なく、六月は船体修理のつち音がひときわ高く館内にこだました。

六月十日、展示館開館の記念日に、昭和60年度工事の正式契約が担当の落合組と東京都の間でかわされ、工事は急ピッチ。連日二人の船大工さんを中心に、船首から

現在の心境は、言葉では書きあらわせませんが、世界から核がなくなるまで、この船の航海は終わらないでしょうね(早大生協学生委員、秋元)。

展示館ができたところに一度来たのですが、展示も充実してきて、進路にそってとてもわかりやすくなっていますね。だからこそ本当に久保山さんや漁労長さんの訴えが心に響くし、元気がでるんだと思う。核全面禁止は絶対必要だと思っし、そのためにも福竜丸の役割は大きいと思います。今度はもっとたくさん仲間をつれてきた

商船大の実習生もさっそうと

船尾まで百本以上の肋骨のとりかえ作業がはじまった。甲板をいねいにはがし、一本一本曲がりかたの異なる肋骨をはかり曲線を太い材木に墨入れし削っていかねばならず慎重さと精密な技術が要求される。

晴れ間をぬって、小学校の社会科の見学会はつづき、公園の関係

いと思います(早大生協学生委員 深野政之)。

漁労長さんの手記、かすかにしか読みとれないところもあります。が、「世の中の正義を求め、平和をねがうのはいつも貧しい名もな人だ」という意味の言葉、同感です。

私たちが何をできるのか、まだわからない気はしますが、何かをやらなければならぬのでしよう。杉並の「原水爆禁止の署名」の文面、素朴ですね。そこが、出発点なのかもしれない、と思います(矢野)。



者も新年度の研修の一環としてあいついで見学。東京商船大学の実習生も、さっそうとしたセーラー姿で来館、地域生協のお母さんたちのグループによる見学も多かった。また、七月〜八月にかけ各地でひらかれる「平和のための戦争展」の準備のため、高知・京都・大阪・埼玉・東京などから担当者が展示館を見学、ビキニ事件にかんする資料もとパネル・資料の借出し申し入れがあった。

編集後記

▼六月三十日、焼津市の歴史民俗資料館がオープンした。見学者の一番の関心はやはり第五福竜丸コーナーらしく、感慨深げに展示物を見ている人の姿が目につく。
▼正面の、壁一面の焼津港の写真をバックに置かれた第五福竜丸の模型(縮尺1/10)は、展示館まで足を運ぶなど、約一年かけ苦労して制作した石原鉄次郎さんの作品。
久保山愛吉さんの遺骨を抱くすずさんと三人の女の子の写真是何度見ても胸をうつ……。だが、全体を見ると、事件が「過去」のものとしてとらえられているという印象をうける。要請があれば、資料を寄贈してもよいという市民の声も聞かれる。今後、よりいっそうの福竜丸コーナーの充実を期待したい(は)。

●100万人参観者運動を!

85年6月来館者数	3,791名
通算1ヵ月平均来館者数	5,177名
当月1日平均来館者数	146名
通算来館者数	564,324名



「ロンゲラップ式ビリヤードだ」と少年たち。彼らも島にもういない。

●核実験の後遺症・ロンゲラップ島

愛する故郷を離れる

文・写真 春日孝之

「新聞社入社が決まったが、その前に、マーシャルへ行ってみたい」——昨年暮れ、展示館に訪れた一青年、春日孝之さん。春日さんはこの一月、予定通り毎日新聞社入社前に、マーシャル行きを實現、キリ島、イーバイ島、ロンゲラップ島を二カ月にわたり回ってきた。「マーシャルの人々と接しなから感じたことは、日常のなかに大きく入り込んでいる過去の原水爆の重荷です。原水爆がもたらした後遺症はあまりにも大きすぎる」と春日さん。以下は、春日さんの現地ルポ。若き記者の今後の活躍を祈りつつご紹介したい。帰国後、春日さんは福岡県久留米支局配属となった。(編集部)

この一月から三月にかけて約二カ月間、太平洋のマーシャル諸島を旅行した。米国の原水爆実験で

「この島が本当に放射能に汚染されているのだろうか……」——妙な感慨を抱きながら島に上陸した。約二百五十人の住民がほとんど総手で出迎えていた。首都マジューロヤクエゼリン環礁から帰島する者がいたのだ。子どもたちが静かな波打ち際で遊んでいる。裸に近い子も多い。大人たちへのあいさ

つもそこそこに、ぼくは十数人いる子どもたちの中に入ってしまった。見知らぬ人たちの中に早く溶け込むには、子どもとまず、仲良くなるのが一番いいと思うのだ。ぼくの英語は子どもたちにほとんど通じないが、それ以上に、ぼくはマーシャル語が分らない。逆に、このことが会話の突破口になる。「一、二、三……」と勝手に、マーシャル語で唱え始めた。子どもたちは注目して近寄ってくる。そして、発音をきょう正してくれる。何度も直された。正確に発音できるような根気よく指導してくれるが、こちらの根気が続かない。「わからん」——思わず日本語で叫んだ。すると子ども一人がすかさず「わからん」とおうむ返し。いたずらっぽくニッと笑ってみせた。

子どもたちとの遊びも疲れはじめた夕暮れ、住民の信望が厚く国会議員でもあるジェットン氏が、ぼくの寝所となる診療所へ案内してくれた。そこで氏は、数カ月後に控えたクエゼリン環礁への移住計画(五月二十日から二十九日にかけて実施、六月十五日付朝日新聞「福竜丸だより付録」で詳報)の



【連載】ヒロシマ・ナガサキ被爆四十年の中で (2)

核兵器と私

永井秀明

一九五四年は、私が北海道の田舎の高校を卒業して北海道大学に入学した年に当る。生活のためにアルバイトに追われる状態であったが、ビキニ事件、放射能被害の新聞報道には注目し、雑誌「世界」も大学生協の書店で求めるようになっていた。物理学を専攻しようとして決めていた事も、これらの問題に関心を高める方向に作用したのかも知れない。

次に平和問題を強く意識するようになったのは、大学を卒業して大学院に進んだ一九五八年、警察官職務執行法問題と引き続く安保改訂問題であった。いつの間にか大学院生代表として、安保改訂阻止全学共闘会議(教職員学生が参加し、暴力は一切否定する立場であった)の事務局幹事の役回りとなり、国会請願の地域署名班の編成や代表の国会派遣、学習講演会や市内デモ行進などの準備に追われるようになっていた。

一九六〇年末から、原子力潜水艦の太平洋配備に先立って十勝に建設される電波灯台・ロランCの重大性を警告する場に、一九六三年からは自衛隊違憲訴訟としての恵庭裁判闘争にも顔を連ねることになった。

一九六六年縁があって広島大学に転じたが、核狂乱と言われる程の核軍拡競争の実態を分析、警告する側に身を置いていた。一九六九年の大学紛争に対応するために設置された公的な大学改革委員会に、二年余参加し二百回もの会議に出席したが、広島に置かれた大学として、平和や核の問題に真正面から取り組む研究所の設置を強く願うようになった。(現在細々ながら広島大学平和科学研究センターとして活動している)

この頃から広島で平和教育運動が起り、小・中・高校の先生方を中心に教育実践が積み重ねられるようになっていたが、教材作りや教師

用の指導資料づくりに参画するようになった。おかれて大学でも平和問題の講座が設けられるようになり、全国で十指を数えるようになった。

第一回国連軍縮総会に合わせて行なわれた原爆記録写真集運動、第二回軍縮総会を視野に入れて取りくまれた10フィート運動などにも、企画段階から参加し一つの推進力になったと自負している。

広島への修学旅行生が年間五〇万人余となり、年老いた被爆証言者も生命ある限り若者に伝えたいと情熱を燃している。次の世代を担う若者をどのように平和の守り手とするかについては、大まかな方向が見えてきたようにも思う。

しかし核軍拡は止まらず核戦争の危険も減ってはいない。日本の平和、原水禁運動は、依然として海外の平和運動家が憂慮するような弱さをもちつづけている。被爆40周年の今年、広島・長崎を「世界に広がるヒバクシャ」の中に位置づけ、世界のヒバクシャと連帯する運動を構築したい。平和・軍縮学習に参加する青少年たちが、地球的規模で平和のネットワークを張りめぐらし、若者たちが平和

な世界の創り手になるような、そういう将来を切り開く手助けを私どもの研究所は目指している。(YMCA国際平和研究所副所長)

●話題の本

「核いま、地球は……」 ユニークな反核入門書「核いま、地球は……」が発売された。地球は……が発売された。

オールカラーで視覚に訴える点では、昨年話題を呼んだ「日本国憲法」に通じるが、現在の核問題をさまざまな角度から斬新な構成でとらえている。特に豊崎博光氏の写真がすばらしい。第五福竜丸も紹介されている。一読をおすすめしたい。

発行 講談社
定価 六八〇円



真意を話してくれた。

「子どもたちのためには——」 「これ以上この地にとどまることはできません。島は放射能に汚染されたままです。子どもたちへの影響が心配なのです。大人たちはみんな、頭痛や腹痛を訴え、自分の体が正常でないことを知っています。愛するこの島を離れるのはこの上なく悲しいことです。米国の放射能の除去をしてくれない限り、島を棄てる以外に方法はないのです。子どもたちを守るためには棄てざるを得ないのです。」 診療所のテーブルに米エネルギー省発行の案内パンフがあった。「ガン予防健診」とある。その後若い男たちが立ち寄ってパンフに目を通す姿を何度も見た。聞くと「ガンが心配だ」と一様にいう。男たちは幼少時代から、今の子どもたちと同じように島を駆け、波とたわむれて育ってきたのだらう。そうして島に住み続けてきた結果が「ガンへの怯え」だった。

「子どもたちのためには——」というジェットン氏の言葉がいつまでも頭に残っている。